

病院とかがかりつけ医 ——活用し情報共有

複数の医療機関が患者の診療情報を共有するネットワークシステム「長崎地域医療連携ネットワークシステム（あじさいネットワーク）」に設立から携わった長崎大大学院の松本武浩准教授（49）が松江市内でこのほど、講演した。医療の地域連携を促し、先進的な取り組みとして注目されるあじさいネットワークの利点などを解説した。要旨を紹介する。

（生活文化部・村上栄太郎）

長崎大大学院 松本准教授が講演

あじさいネットワークは、同意がえられた中核病院の患者のカルテ情報の大部分を、ネットを通じて地



あじさいネットの利点を解説する松本武浩長崎大大学院准教授—松江市学園南1丁目、くにびきメッセ

あじさい ネット 検査や薬の重複解消

域のかかりつけ医（開業医）や他の病院が閲覧できるネットワークシステム。NPO法人が運営しており、閲覧側は月会費を払って利用する。

大村市の2病院を対象に2004年から運用が始まり、長崎市や離島にも広がり、閲覧可能な中核病院は14カ所になった。利用する医療機関数は約150に増えている。

地域医療の仕組みは、入院から治療までを1病院で受け持つ「病院完結型」から、複数の病院などが治療段階ごとに役割分担する「地域完結型」に変わった。地域完結型では、かかりつけ医が地域医療の主体となり、適切な治療の提供には、病院間の情報連携が不可欠だ。情報連携は中核病院と

かかりつけ医の両者があじさいネットワークを利用することで実現できるため、利用が増え続けている。開覧できるカルテ情報は、中核病院の電子カルテと連動しており、患者が受診した15分後には更新される。血液検査の結果や服薬履歴、放射線画像などの情報が得られる。システム導入以前は、中核病院を退院

後に通院するかかりつけ医には、必要な情報が乏しく、検査や処方薬の重複も起きていた。こうした無駄が解消される。

中核病院での治療経過の共有を通し、かかりつけ医と中核病院の医師が相互に紹介し合う効果が生まれた。かかりつけ医は、患者を見守る関係が維持できるのに加え、治療履歴を閲覧することで最新の治療方法が学べる。中核病院の医師は、かかりつけ医に患者を紹介した後、質の高い医療を継続してもらいやすくなるのがメリットだ。

今後は、専門医の遠隔画像診断の実現や、へき地・離島医師向けの専門カンファレンス（症例検討会）の開催など、診療や医師の生涯教育を支援する機能の拡充が大事だ。へき地・離島に着任する医師の不安を取る

り除き、定着を促進させることにつながる。

薬剤師や介護士などの他職種の利用を勧め、高度医療から日常生活まで連続した医療・介護の提供を実現できるような期待もされている。

国は、シームレス（つなぎ目のない）な地域連携医療の実現を求めている。あじさいネットワークのような地域医療IT（情報技術）連携は、こうした構想を強力に支援するツールであり、必要性はより増している。